

研究ノート

近現代文芸の中の広告 (1)
— 明治期以降の文学作品中の言説渉猟 —

水 野 由多加

Advertising in modern literature (1);
Examples of Japanese advertising in modern literature (1)

Yutaka MIZUNO

Abstract

The Japanese word “Koukoku,” which means the translation and coinage of advertising, was used after the Meiji Era instead of “Hirome,” which just means spread out. The author conducted an extensive literature review to document examples of Koukoku in the literature following the Meiji Era, and describes them in this paper. This effort may prepare the way for a deeper investigation in the form of media studies into the definition and meaning of advertising in Japanese society and culture.

Key words: literary text, literature, advertising, advertisement, discourse, sociolinguistics

抄 録

広告という言葉は Advertising の翻訳造語として、それまでの広目に代わって明治期以降日本社会で使用される。筆者は、今回、明治期以降の文芸の中にその用例を狩猟、観察する。この作業は今後のより深い広告に関する社会的文化的な定義と意味についてのメディア論的な検討を準備することとなる。

キーワード：文芸、広告、言説、社会言語研究

本研究ノートは文学研究ではなく、文芸作品をテキストとして用いる社会的あるいはメディア論的広告研究である¹⁾。社会的とは、当事者が言説を用いた際に「意図した意味（たとえば新聞紙上の連載小説の街の描写）」ではなく、たとえばその後失われた「意図せざる意味」を観察し探る点にある。また「社会の中の言説」としていかに広告現象が扱われ、意味づけられたかを見る素材収集という意味である。言説としての「広告」が、前提とし、また指し示した「社会現象あるいはメディアとしての広告」を、他の資料ともあわせて観察する研究を企図した。

本研究ノートでは、まず文芸中の「広告」言説を取材し、今後の分析のための資料集、覚えとする。これらの渉獵的な作業によって、当然視される場合のある「広告」の持つ社会的な意味（言説）、現象、機能、形態、形式、などについての立体的な理解を目指す。こうした素材収集と今後の分析によって、現代の情報環境と広告現象の相対化が図られるものと考えた。

以上の観点から、本稿ではまず、第二次世界大戦以前のを素材として掲げる²⁾。

1. 坪内逍遙「当世書生氣質」（1887、M20）に見る「人探し」

第15回 旧人（ふるき）を尋ねる新聞紙の広告に 顔鳥ゆくりなく由縁の人を知る

2. 斎藤緑雨「青眼白頭」（1889、M22）に見る「広告代」

○志を抱いて死す、さもしからずや。一般字典の訓をしふる所によれば、大丈夫（だいぢやうぶ）は男の義なり、女を抱（いだ）いて死せんのみ。何で死んでも広告代は同額也。

3. 徳富蘆花「小説 不如帰」（1898、M31）に見る「黒囲」

二月（きさらぎ）初旬（はじめ）ふと引きこみし風邪（かぜ）の、ひとたびは瘧（おこたり）しを、ある夜姑（しゅうとめ）の胴着を仕上ぐると急ぐまに夜（よ）ふかししより再びひき返して、今日二月の十五日というに浪子はいまだ床あぐるまで快きを覚えざるなり。

今年の寒さは、今年の寒さは、と年々に言いなれし寒さも今年こそはまさしくこれまで覚えなきまで、日々吹き募る北風は雪を誘い雨を運びざる日にもさながら髓を刺し骨をえ

ぐりて、健やかなるも病み、病みたるは死し、新聞の広告は黒圀のみぞ多くなり行く。この寒さはさらぬだに強からぬ浪子のかりそめの病を募らして、取り立ててはこれという異なれる病態もなけれど、ただ頭かしら重く食（しょく）うまからずして日また日を渡れるなり。

4. 黒岩涙香「幽霊塔」（1899、M32）に見る「広く呼びかける個人が出す広告」

是だけで肝腎の誰が発したかは分らぬ故、余は此の地の田舎新聞社に行き広告を依頼した、其の文句は「何月幾日の何時頃人に頼まれて此の土地の電信局へ行き、倫敦（ろンドン）のAMへ宛てた電信を差し出した小供は当田舎新聞社へまで申し来たれ、充分の褒美を与えん」と云う意味で、爾して新聞社へは充分の手数料を払い、若し其の小供が来たら、直ぐに倫敦の余の住居へ寄越して呉れと頼んで置いた。

5. 夏目漱石「倫敦消息」（1901、M34）に見る「賃貸物件情報」

我輩の先生の処が一問あいておれば置てもらうのだけれども、それは聞がないのだからできない相談だ。こう云う時になると西洋の新聞は便利だ。万事広告の世界なのだから下宿の広告がいくらでもある。我輩が以前下宿をさがす時 Daily Telegraph の下宿の広告欄を見た事がある。始めから終りまで読むのに三時間かかった事を記憶（きおく）している。今は「テレグラフ」を取っておらん、「スタンダード」だ。この新聞は上品な新聞だからここへ出る広告なら間違はないと思って四月十七日の分の広告欄を読み始めると、存外営業的のが多くって素人家へ置きたいと云うのが少ない。しかしいろいろがある。「宿料低廉、風呂付、食物上等」こんなのは普通なのだ。「ハイドパークに面し地下電気へ三分地下鉄道へ五分、貴女と交際の便利あり」なんと云うのがある。「球突随意ピアノあり gay society, late dinner」これも珍らしくない。「レートジンナー」と云うのはこの頃の流行なのだ。我輩（わがはい）などには至極（しごく）不便だ。その中で下のようなを見出した。「立派なる室を有する寡婦及其の妹と共に同宿せんとするあまり派出やかならざる紳士を求む。御望の方は〇〇筆墨店へ御一報を乞う」。まずここへでも一つあたってみようと思ふ気になったから直ぐ手紙を書いて、宿料その他委細の事を報知して貰いたい、小生の身分はかくかく職業はかくかく、なるべく低廉でなるべく愉快的処に住みたいと勝手な事をかいてやった。

6. 島崎藤村「破戒」(1906、M39)に見る「広告」

本町の雑誌屋は近頃出来た店。其前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くやうに張出してあつた。かねて新聞の広告で見て、出版の日を楽しみにして居た『懺悔録』——肩に猪子（いのこ）蓮太郎氏著、定価までも書添へた広告が目につく。立ちどまつて、其人の名を思出してさへ、丑松はもう胸の踊るやうな心地（こゝち）がしたのである。

7. 田山花袋「蒲団」(1907、M40)にみる「求人広告」

私は決心致しました。昨日上野図書館で女の見習生が入用だという広告がありましたから、応じてみようと思います。二人して一生懸命に働きましたら、まさに餓（うえ）るようなことも御座いますまい。先生のお家にこうして居ますればこそ、先生にも奥様にも御心配を懸けて済まぬので御座います。どうか先生、私の決心をお許し下さい。

芳子 先生 おんもとへ

8. 森鷗外「独身」(1910、M43)に見る「広告柱」と「伝便」

小倉の冬は冬という程の事はない。西北の海から長門の一角を掠かすめて、寒い風が吹いて来て、蜜柑（みかん）の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣やって、暫（しばら）くおもちゃにされていて、とうとう縁の下に吹き込んでしまう。そういう日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまう。

外はいつか雪になる。おりおり足を刻んで駈けて通る伝便（でんびん）の鈴の音がする。

伝便と云っても余所（よそ）のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられている二つの風俗の一つである。常磐橋（ときわばし）の袂（たもと）に円い柱が立っている。これに広告を貼（はり）附けるのである。赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらい筆使いの画だのを書いて、新らしく開（あけ）た店の広告、それから芝居見せものなどの興行の広告をするのである。勿論柱はただ一本だけであって、これに張るのと、大門町の石垣に張る位より外ほかに、広告の必要はない土地なのだから、印刷したものより書いたものの方が多い。画だっても、巴里パリの町で見る affiche アフィッシュのように気の利いたのはない。しかし兎（と）に角（かく）広告柱があるだけはえらい。これが一つ。

今一つが伝便なのである。Heinrich（ハインリヒ）von（フォン）Stephan（ステファン）が警察国に生れて、巧に郵便の網を天下に布（し）いてから、手紙の往復に不便はないはずではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁の事である。一日の間の時を以て算する用弁を達するには、郵便は間に合わない。Rendez ランデ-vous ヴウ をしたって、明日あす何処どこで逢（あ）おうなら、郵便で用が足る。しかし性急な変で、今晚何処どこで逢（あ）おうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割（さ）く嫌（きら）いがある。その上巖（いかめし）い配達の為方（しかた）が殺風景である。そういう時には走使（はしりつかい）が欲しいに違ない。会社の徽章（きしょう）の附いた帽を被（かぶ）って、辻々（つじつじ）に立っていて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買って邪魔になるものを自宅へ持って帰らせる事でも、何でも受け合うのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据（すわ）っている紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云っているのが、この走使である。

伝便の講釈がつい長くなった。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりと急調に聞えるのである。

それから優しい女の声で「かりかあかりか、どっこいさのさ」と、節を附けて呼んで通るのが聞える。植物採集に持って行くような、ブリキの入物に花欄糖（かりんとう）を入れて肩に掛けて、小提灯（こちょうちん）を持って売って歩くのである。

伝便や花欄糖売は、いつの時侯にも来るのであるが、夏は辻占（つじうら）売なんぞの方が耳に附いて、伝便の鈴の音、花欄糖売の女の声は気に留まらないのである。

こんな晩には置炬燵（おきごたつ）をする人もあろう。しかし実はそれ程寒くはない。

翌朝手水鉢（ちょうずばち）に氷が張っている。この氷が二日より長く続いて張ることは先ず少い。遅くも三日目には風が変る。雪も氷も融（と）けてしまうのである。

9. 高村光太郎「珈琲店より」（1910、M43）に見る「明滅電灯」

歩き出したが、別に其の女に追いつかうといふのではない。ただ、河の瀬を流れる花卉の一つが右へ行くと、其の後のも右へ行く様に吸はれて行つたまでである。CRÉDIT LYONNAIS の銀行の真黒な屋根の上に大熊星が朧ろげな色で逆立ちをしてゐる。BOULEVARD の両側の家並の上の方に CHOCOLAT MEUNIER だの、JOURNAL だの明滅電灯の広告が青くなつたり、赤くなつたりして光つてゐる。芽の大きくなつた並木

のMARRONNIERは、軒並みに並んでゐる珈琲店（カフェ）の明りで梢の方から倒（さ）かにしまに照されて、紫がかつた灰色に果しも無く列つて見える。その並木の下の人道を強い横光線で、緑つばい薄墨の闇の中から美しい男や女の顔が浮き出されて、往つたり来たりしてゐる。話声と笑声が車道の馬の蹄に和して一種の節奏リズムを作り、空気に飽和してゐる香水（パルフェン）の香と不思議な諧調をなして愉快に聞える。動物園のインコやアウムの館へ行くと、あの黄いろい高い声の雑然とした中に自ら調子があつて、唯の騒音でも無い様なのに似てゐる。僕は此の光りと音と香ひの流れの中を瀬のうねくるままに歩いてゐた。三人の女は鋭い笑ひ声を時々あげながらまだ歩いてゐる。

10. 有島武郎「或る女」（1911～1913、M44～T2）に見る「意見広告」

突然小さな仙台市は雷にでも打たれたようにある朝の新聞記事に注意を向けた。それはその新聞の商売がたきである或る新聞の社主であり主筆である某が、親佐と葉子との二人（ふたり）に同時に慇懃（いんぎん）を通じているという、全紙にわたった不倫きわまる記事だった。だれも意外なような顔をしながら心の中ではそれを信じようとした。

この日髪の毛の濃い、口の大きい、色白な一人ひとりの青年を乗せた人力車（じんりきしゃ）が、仙台の町中を忙せわしく駆け回ったのを注意した人はおそらくなかつたろうが、その青年は名を木村（きむら）といって、日ごろから快活な活動好きな人として知られた男で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の広告欄には、二段抜きで、知事令夫人以下十四五名の貴婦人の連名で早月親佐（さつきおやさ）の冤罪（えんざい）が雪（すす）がれる事になった。この稀有（けう）の大（おお）げさな広告がまた小さな仙台の市中をどよめき渡らした。しかし木村の熱心も口弁も葉子の名を広告の中に入れる事はできなかった。

11. 与謝野晶子「巴里より」（1914、T3）に見る「ユウゴオが著作の広告に用いた絵」

リウウ・デ・ゼコルの通りへ出て大学前の伊太利亜（イタリア）料理で午餐（ひるめし）を済ませた後のち、地下電車に乗つてユウゴオの旧宅をプラス・デ・（濁点付き片仮名ワ）スチル街に訪（と）うた。旧宅は十八世紀の建築だと云ふ一廊の中に在つて、屋上に三色（しよく）旗が翻つて居る。故文豪が一八三三年から一八四八年まで住んだ家だ。ユウゴオを記念する小博物館として大抵の遺作、遺品、故人の著作に挿（はさ）んだ絵の下絵、著

作の広告に用ひた絵、其他（そのた）故人に関係ある雑多の物が陳列されて居る。

12. 吉野作造「蘇峰先生の『大正の青年と帝国の前途』を読む」（1917、T 6）に見る「『国民新聞』の広告」

所謂文壇に復活したる蘇峰先生は『時務一家言』に引続いて『世界の変局』及び『大正政局史論』を出し、更に去年の夏より筆硯を新たにして『大正の青年と帝国の前途』なる一篇を公にした。始め新聞に掲載されて居つた節には、どれ丈け世間の耳目を惹いたか知らないが、十一月の初め一部の纏まつた著書として公にさるゝや、非常の評判を以て全国の読書界に迎へられ、瞬間に数十万部を売り尽したと『国民新聞』は云つて居る。蘇峰先生の盛名と『国民新聞』の広告とを以て、驚くべき多数の読者を得たといふ事は固より怪しむに足らぬけれども、而かも旬日ならずして売行万を数ふるといふのは、兎にも角にも近來稀なるレコードである。是れ丈け沢山の人に読まれたといふ事、其事自身が既に吾人をして之を問題たらしめる値打がある。況んや蘇峰先生の名は反動思想の些（いささ）か頭を擡（もた）げんとしつゝある今日に於て又少からず社会の注目を惹くべきに於てをや。

13. 薄田泣菫「名文句」（1918、T 7）に見る「広告コピー募集」

米国のボストンにペン先の製造業者がある。数多い同業者を圧倒して、店のペン先を売り弘めようとするには、何でも広告を利用する外には良い方法が無かつた。で、一千弗の懸賞附で、ペンに関する独創的な名文句を募集する事に定めた。

懸賞附の広告が発表せられると、方々から応募原稿が山のやうに集まつて來た。整理係が汗みづくになつて、それを取り調べてみると、なかに一通大判な用紙に、剣先で書いたかと思はれるやうな大きな文字で、

「ペンは剣よりも偉大なり。」

と認めてあるのがあつた。そして御叮嚀に附箋までして、

「一寸都合がありますから、懸賞金は電報為替でお送り下さるやうに。」

と添へ書がしてあつた。

整理係はそれを見て、一寸からかつてみたくなつた。で、早速手紙を出して、貴方の応募原稿は素晴しく立派に出来てゐるが、あの名文句が貴方の独創であるといふ証拠さへあ

つたら、懸賞金は直ぐにお届けしようと言つてやつた。

すると、折返して返事が来た。一体直ぐに手紙の返事を寄こす人には神信心の厚い、正直者が多いものだが、この応募者も察する所、正直者だつたに相違ない。返事にはかうあつた。

「私の送つた文句は、私が何処かで読み覚えたものか、それとも自分の頭から出たものか、はつきりとは申し上げられません、然し私は今日まで本といつては、国民読本と旧約聖書の箴言しか読んだ事ありませんから、この二つの本に無い文句なら、私の拵へたものとして差支ない筈です。重ねて申します。懸賞金を折返し電報為替で送つて下さい。」

だが、笑つてはいけない。この応募者は読本と箴言と——書物を二冊も読んでゐる。書物を二冊も読むといふ事は、日本では贅沢の沙汰だとしてある。

14. 室生犀星「性に目覚める頃」(1918、T7)に見る「いまわしい半裸体の女」

私はひとり机に向っているときでも、いろいろな恋の詩をかいたり、または、いつまでも一つところを見て、何をすることもなくぼんやりしていることが多かった。妙にからだ中がむずがゆいような、頭の中がいらいらしくなつて、たえず女性のことばかり考えられてくるのであった。たとえば自分の蒼白い腕の腹をじっと見つめたり、伸ばしたり曲げたりしながら、それが或る美しい曲線をかたちづくり、そこに強烈な性慾的な快感を味ったり、自分で自分の堅い白い肉体を吸って見たりしながら、飽きることのない悩ましい密室の妄念にふけっているばかりではなく、ときとすると、新聞の広告に挿入されたいまわしい半裸体の女などを見ると、自分の内部にある空想によって描かれたものの形までが手伝つて、永い間、それを生きているもののような取扱いに心は悩み、快感の小さい叫びをあげながら、その美しい形を盛りあげたり、くずしてみたりするのであった。

15. 菊池寛「真珠夫人」(1920、T9)に見る「広告して歩く」

勝平の顔色は、咄嗟に変つた。その顫(こめかみ)の筋肉が、ピク／＼動いたかと思ふと、彼は顫へる手で箸を降しながら、それでも声丈だけは、平静な声を出さうと努めたらしかつたが、変に上ずつてしまつてゐた。

「勝彦! 勝彦勝彦と、貴女あなたはよく口にするが、貴女は勝彦を一体何だと思つてゐるのです。もう、一月以上此家にゐるのだから、気が付いたでせう。親の身として、口に

するさへ恥かしいが、あれは白痴ですよ。白痴も白痴も、御覧の通とほり東西も弁じない白痴ですよ。あゝ云ふ者を三越に連れて行く。それは此の莊田の恥、莊田一家の恥を、世間へ広告して歩くやうなものですよ。貴女も、動機は兎も角、一旦此の家の人となつた以上、かう云ふ馬鹿息子があると云ふことを、広告して下さらなくつてもいいぢやありませんか。」

16. 芥川龍之介「僻見」（1924、T13）に見る「公にまず言っておく」こと

広告

この数篇の文章は何人かの人々を論じたものである。いや、それらの人々に対する僕の好悪（かうを）を示したものである。

この数篇の文章の中に千古の鉄案を求めるのは勿論（もちろん）甚だ危険である。僕は少しも僕の批判の公平を誇らうとは思つてゐない。実際又公平なるものは生憎（あいにく）僕には恵まれてゐない、——と云ふよりも寧（むし）ろ恵まれることを潔（いさぎよ）しとしない美德である。

この数篇の文章の中に謙譲の精神を求めるのはやはり甚だしい見当違ひである。あらゆる批判の芸術は謙譲の精神と両立しない。就中（なかんづく）僕の文章は自負と虚栄心との吸ひ上げポンプである。

この数篇の文章の中に軽佻（けいてう）の態度を求めるのは最も無理解の甚だしいものである。僕は締切り日に間に合ふやうに、匆忙（そうぼう）とペンを動かさなければならぬ。かう云ふ事情の下にありながら、しかも軽佻に振舞ひ得るものは大力量の人のあるばかりである。

この数篇の文章は僕の好悪を示す以外に、殆（ほとんど）取り柄のないものである。唯僕は僕の好悪を出来るだけ正直に示さうとした。もし取り柄に近いものを挙げれば、この自ら偽るの陋（ろう）を取てしなかつたことばかりである。

晋書礼記（しんしよらいき）は「正月元会（ぐわんゑ）、自獸樽（はくじうそん）を殿庭に設け、樽蓋上（そんがいじやう）に白獸を施し、若もし能よく直言を献ずる者あらば、この樽を發して酒を」飲ましめたことを語つてゐる。僕はこの数篇の文章の中に直言即ち僻見（へきけん）を献じた。誰か僕の為に自獸樽を發し一杓の酒を賜ふものはないか？ 少くとも僕の僻見に左袒（さたん）し、僻見の權威を樹立する為に一臂（び）の力を仮すものはないか？

17. 夢野久作「東京人の墮落時代」(1925、T14)に見る「他に知らしめる印」

第二職業広告用の理髪

彼女達職業婦人のグループはこうしたわけで派手を競うた。そうして、その背景や職業に依って服装が違って来ると同時に、頭もこれに釣り合っただ変化して来た。すなわち背景と職業が似通っているために、その服装から次の恰好にまで共通点が出来て来る。丸ビル式や銀座髷はこうして出来た。

丸ビルの方は、丸ビルそのものはもとより、付近の背景が皆ガッシリした大建築ばかりで、そこに出入りをする職業婦人は大抵事務員式のスタイルであった。

銀座の方は大部分バラック式の派手やかなもので、職業婦人といえは大部分飲食に関係ある店の女給である。

そうした空気の中からこんな髷が生れたのか、それとも或る一人がその特徴から工夫し出して全体に広めたものか、その辺は判然せぬ。いずれにしてもこのような背景や職業に……そうしてその第二の職業の広告に最適したスタイルである事は云う迄もない。

尚、丸ビル式は大正十三年の秋の末まで勢（いきお）いがあつたが、例の不良少女団ジャンヌダルクの一件以来、勢力を打ち消された形になった。これに取って代るべく生れたのが銀座髷かどうか知らぬ。

もしそうだったら、近い中（うち）に又一騒ぎ持ち上るかも知れぬ。

18. 正岡子規「墨汁一滴」(1923、T12)に見る「資本金募集の広告」と「広目屋」

近來雑誌の表紙を模様色摺（いろずり）となしかつ用紙を舶来紙となす事流行す。体裁上の一進歩となす。

雑誌『目不醉草（めざましぐさ）』の表紙模様不折（ふせつ）の意匠に成る。面白し。但（ただし）何にでも梅の花や桜の花をくつつけるは不折の癖と知るべし。

雑誌『明星（みょうじょう）』は体裁の美麗（びれい）なる事普通雑誌中第一のものなりしが遂に廃刊せし由（よし）気の毒の至なり。今廃刊するほどならば最後の基本金募集の広告なからましかば、死際一層花を添へたらんかと思ふ。是非なし。

雑誌『精神界』は仏教の雑誌なり。始に髑髏（どくろ）を画（え）がきてその上に精神界の三字を書す。その様何とやら物質的に解剖（かいぼう）的に心理を研究する意かと思はれて仏教らしき感起らず。髑髏の画（え）のやや精細なるにも因（よ）るならん。

雑誌『みのむし』は伊賀より出づる俳諧の雑誌なり。表紙に芭蕉（ばしょう）の葉を画けるにその画拙（つた）なくしてどうやら蕪（かぶら）の葉に似たるやう思はる。蕪村（ぶそん）流行のこの頃なれば芭蕉翁も蕪村化したるにやといと可笑おかし。

雑誌『太陽』の陽の字のつくり時に易（えき）に従（したが）ふものあり。そんな字は字引になし。（二月二十七日）

多くの人の俳句を見るに自己の頭脳をしばらくしてしばらく出したるは誠に少く、新聞雑誌に出たる他人の句を五文字ばかり置きかへて何知らぬ顔にてまた新聞雑誌へ投書するなり。一例を挙げていはば

○○○○○裏の小山に上りけり

といふ十二字ありとせんに初（しょ）五に何にても季の題を置きて句とするなり。「長き日の」「のどかさの」「霞む日の」「炬ろ塞いで」「桜咲く」「名月や」「小春日の」等そのほか如何なる題にても大方つかぬといふはなし。実に重宝なる十二字なり。あるいは

灯ひをともし石燈籠（いしどうろう）や○○○○○

といふ十二字を得たらば「梅の花」「糸柳」「糸桜」「春の雨」「夕涼み」「庭の雪」「夕時雨しぐれ」などそのほか様々なる題をくつつけるなり。あるいは

広目屋の広告通る○○○○○

といふ十二字ならば「春日かな」「日永かな」「柳かな」「桜かな」「暖き」「小春かな」などを置くなり。これがためには予かねてより新聞雑誌の俳句を切り抜き置き、いざ句作といふ時にそれをひろげてあちらこちらを取り合せ、十句にても百句にてもたちどころに成るを直（ただ）ちにこれを投書として郵便に附す。選者もしその陳腐剽窃（ひょうせつ）なることを知らずして一句にても二句にてもこれを載すれば、投句者は鬼の首を獲えたらん如くに喜びて友人に誇り示す。此（か）くの如き模倣剽窃の時期は誰にも一度はある事なれど、幾年経てもこの泥棒の境涯を脱し得ざる人あり。気の毒の事なり。（三月十三日）

19. 久保田万太郎「雷門以北」(1927、S 2)の「本屋の屋根の上の膨大な広告」

広小路(一)

……浅草で、お前の、最も親愛な、最も馴染(なじみ)のふかいところはどこだときかれれば広小路の近所とこたえる外(ほか)はない。なぜならそこはわたしの生れ在所である。明治二十二年田原町で生れ、大正三年、二十六の十月までそこに住みつづけたわたしである。子供の時分みた風色(けしき)ほど、山であれ河であれ、街であれ、やさしくつねに誰のまえにでも蘇生(よみが)えって来るものはない。——ことにそれが物どころつくところのわたしのような場合にあってはなおのことである。

田原町、北田原町、東仲町、北東仲町、馬道一丁目。——両側のその、水々しい、それ／＼の店舗のまえに植わった柳は銀杏(いちょう)の若木に変わった。人道と車道境界の細い溝は埋められた。(秋になるとその溝に黄ばんだ柳の葉のわびしく散りしいたものである)どこをみてももう紺の香の褪(は)さめた暖簾(のれん)のかげはささない。書林浅倉屋の窓の下大きな釜の天水桶もなくなれば鼈甲(べっこう)小間物松屋の軒さきの、櫛(くし)の画を描いた箱看板の目じるしもなくなった。源水横町の提灯(ちょうちん)やのまえに焼鳥の露店も見出せなければ、大風呂横町の、宿屋の角の空にそそる火(ひ)の見み梯子(はしご)も見出せなくなった。——勿論、そこに、三十年はさておき、十年まえ、五年まえの面影をさえさし示す何ものもわたしは持たなくなった。「渋屋」は「ペイント塗工」に、「一ぜんめし」は「和洋食堂」に、「御膳(ごぜん)するこ」は「アイスクリーム、曹達水(ソーダスイ)」におの／＼その看板を塗りかえたいま——そういっても、カフェエ、バア、喫茶店の油断なく立並んだことよ——たま／＼ひょうきんな洋傘屋あって赤い大きな目じるしのこうもり傘を屋上高くかかげたことが、うち晴れた空の下に、遠く雷門からこれを望見することが出来たといっても誰ももうそれを信じないであろう。しかくいまの広小路は「色彩」に埋もれている。強い濃い「光」と「影」との交錯を持っている。……ということは古く存在した料理店「松田」のあとにカフェエ・アメリカ(いま改めてオリエント)の出来たばかりの謂(い)いではない。そうしてその給仕女たちの、赤、青、紫の幾組かに分たれている謂(い)いでも勿論ない。前記書林浅倉屋の屋根のうえに「日本児童文庫」と「小学生全集」の膨大(ぼうだい)な広告を見出したとき、これも古い酒店さがみやの飾り窓に映画女優の写真の引伸しの飾られてあるのを見出したとき、そうして本願寺の、震災後まだかたちだけしかない裏門の「聖典講座」「日曜講演」の掲示に立交る「子供洋服講習会」の立札を見出したとき、わたしの感懐(かんわい)に背(そむ)いていよ／＼「時代」の潮さきに

乗ろうとする古いその町々をはっきりわたしはわたしに感じた。——浅倉屋は、このごろその店舗の一部をさいて新刊書の小売をはじめたのである。さがみやもまたいままでの店舗を二つに仕切って「めりんすと銘仙めいせん」の見世を一方にはじめたのである。

20. 小山内薫「芝、麻布」（1927、S 2）に見る「南京虫駆除の広告」

明舟町は誠に静かなところである。琴平様の縁日の時は、多少賑うが、ふだんはいつもひっそり閑（かん）としている。前が宮様で、その隣が公園だからでもあろう。私はあんな住心地の好いところを知らない。

併（しか）し、私のいた明舟町の家では、不愉快な事件が起った。風呂場がないので、家の者はみんな銭湯へ行った。ところが、子供が銭湯で水疱瘡（みずぼうそう）という奴をしょって来た。それがよくなると、今度はみんなが虫に刺された。二つずつ赤い跡がついて、ひどく痛むのである。

「南京虫だ。」

誰かがそういい出した。そこいら、気をつけて見ると、柱でも床でも、隙間（すきま）という隙間には、みんな巣を食っていた。

私は「南京虫駆除」の広告を新聞で探して、そこへ手紙を出した。洋服を着た若い男が二人、妙な器械を持って来て、水蒸気で家中を蒸（む）した。お陰で、虫の掃除は出来たが、その代り、大事な本と一緒に蒸されて、みんなべとべとになってしまった。

21. 佐藤紅緑「あゝ玉杯に花うけて」（1927～1928、S 2～S 3）に見る「新聞の広告文字」

先生の目には憤怒（ふんぬ）の涙が輝いた、生徒はすっかり感激してなきだしてしまった。

「新聞の広告や、町の看板にも不心得千万（ふこころえせんばん）な左からの文字がある、それは日本を愛しないやつらのしわざだ。諸君はそれに悪化されてはいかん、いいか、こういう不心得（ふこころえ）なやつらを感化して純日本に復活せしむるのは諸君の責任だぞ、いいか、わかったか」

この日ほどはげしい感動を生徒にあたえたことはなかった。

22. 林芙美子「新版 放浪記」(1928～1930、S3～5)に見る「三行広告受付」

林芙美子と云う名前は、少々私には苦しいものになって来ました。甘くて根気がなくて淋しがりやで。私は一度、この名前をこの世の中からほんとうになくしてしまいたいと考ええています。道を歩いている時、雑誌のポスターの中に、「林芙美子」と云う文字を見出す時がある。いったい林芙美子とはどこの誰なのだろうと考えています。街を歩いている私は、街裏の女よりも気弱で、二三年も着古した着物を着て、石突きの長い雨傘を持って、ポクポク道を歩いている。昔の私は、着る浴衣もなく、紅い海水着一枚で蟄居（ちつきょ）していた事もある。少しばかり原稿がうれだして来ると、「三万円もたまりましたか？」と訊くひとが出て来たけれども、全くこれは動悸（どうき）のする話でした。私の家の近くにあぶらやと云う質屋があるけれども、ここのおやじさんだけは、林芙美子と云うのは案外貧乏文士だねと苦笑しているに違いない。

小都会の港町に生れた赤毛の娘は、そのおいたちのままで、労働者とでも連れ添っていった方が、私にはどんなにか幸福であったかも知れない。今の生活は、私と云うものを、広告のようにキリキザンで方々へ吹き飛ばしているようなものでしょう。生活がまるで中途半端であり、生活が中途半端だからよけいに苦しい。——少しばかり生活が楽になった故、義父も母も呼びよせてはみたけれども、貧しく、あのようにつに共同しあっていた者達の気持ち、一軒の家に集まってみると、一人一人の気持ちが東や西や南へてんでに背を向けているのでした。皆、円陣をつくって、こちらへ向いて下さいと願っても、一人一人が一国一城の主あるじになりすぎているのです。かわやへなぞ這入っていると、思わず涙が溢れる事がある。長い間親達から離れていると、血を呼ぶ愛情はあっても、長い間一ツになって生活しあわないせいか、その愛情と云うものが妙に薄くなってしまっているのを感じている。

——（以下中略）——

（六月×日）

前はライオンと云うカフェーで、その隣りは間口一間の小さいネクタイ屋さん。すだれのようにネクタイが狭い店いっぱいにさがっている。

今日で四日目だ。

三行広告受付で忙がしい。一行が五十銭の広告料は高いと思うけれども、いろんな人が広告を頼みに来る。——芸妓募集、年齢十五歳より三十歳まで、衣服相談、新宿十二社何家と云う風に申込みの人の注文（ちゅうもん）を三行に縮めて受け付けるのだ。浅草、松葉

町カフェードラゴン、と云うのが麗人求むなのだから、私は色々な事を空想しながら受付ける。

かんかんと陽の照る通りを、美しい女達が行く。私はまだ洗いざらしたネルを着ている。暑くて仕方がないけれど、そのうち浴衣の一反も買いたいと思う。

眼の前のカフェーライオンでは眼の覚めるような、派手なメリンスを着た女給さんが出たりはいたりしている。世の中には、美しい女達もあるものだと思う。まるで人形のようだ。第一等の美人を募集するのに違いない。

こうした賑やかな通りは、およそ、文学と云うものに縁がない。金さえあれば、いかなる享樂もほしいままなのだ。その流れの音を私は天幕の中でじっとみつめている。たまには乞食も通る。神様らしきものは通らない。そのくせ、昼食時のサラリーマンの散歩姿は、みんな妻楊枝（つまようじ）を咥えて歩いている。ズボンのポケットに一寸手をつこんで、カンカン帽子をあみだにかぶり、妻楊枝をガムのように噛かんでいる。

私は天幕の中で色々な空想をする。卓子のひき出しの中には、ギザギザの大きい五十銭銀貨が溜（たま）ってゆく。これを持って逃げ出したらどんな罪になるのだろう……。広告主はみんな受取を持って来るから、広告がいつまでたっても出ないとなれば唖鳴りこんで来るかもしれない。これだけの金があれば、どんな旅行だって出来る。外国にだって行けるかも知れない。これだけの金を持って何処かへ行く汽車に乗る。そして、それが罪になって、手をしばられてカンゴクへ行く。空想をしていると、頭がぼおとして来る。この半分を母へ送ってやれば、どんないいひとがみつかったのかと田舎では驚くかもしれない。あのひと達を二人そろって呼びよせる事も出来る。

理想的な同人雑誌を出す事も出来るし、自費出版で美しい詩集を出す事も出来る。卓子の鍵かぎをじっとみつめていると、心がわくわくして来る。ひき出しをあけて金を数える。百円以上も貯（たま）っている。大したものだ。銀貨の重なった上に掌をぴたりとあててみる。気が遠くなるような誘惑にかられる。私以外にはここには誰もいない。四時になれば、あの眼尻にいぼのあるひとが金を取りに来る。

罪人になる奇蹟（きせき）。

何と云う罪になり、どの位カンゴクにはいるものだろう……。

神様がこんな心を与えるのだ。神がね。

「朝から夜中まで」の銀行員の気持ちにもなる。

プロシャのフレデリックは「誰でも、自分自身の方法で自分を救わなければならぬ」と云ったそうだ。ああ、誰かが金を持って、この天幕を訪れる。私は鉛筆をなめながら、註

文主の代筆で三行の文章を綴る。みんな美しい奴隷を求める下心だ。その下心を三行に綴るのが私の仕事。もう、私の頭の中には詩も童話も何もない。

長い小説を書きたいと想う事があっても、それは只、思うだけだ。思うだけの一瞬がさあっと何処かへ逃げてゆく。

花柳病院の広告を頼みに来る医者もいる。まことに、芸妓募集、花柳病院とは充実したものだ。私は皮肉な笑いがこみあげて来る。あらゆるファウストは女に結婚を約束して、それからすぐ女を捨てる。三行広告にもいろいろな世相が動いている。

それが証拠には、産婆の広告も毎日やって来る。子供やりたしとか、貰いたしとか、いかようにも親切に相談とか。広告を書きながら、私は私生児を産みに行く女の唸り声を聞くような気がする。

そして、私は、毎日、いぼさんから八十銭の日給を頂戴してとことこ本郷まで歩いて帰るのだ。

感化院。養老院。狂人病院。警察。ヒミツタンテイ。ステッキガール。玉の井。根津あたりの素人淫売宿。あらゆる世相が都会の背景にある。

或る作家曰いわく、三万人の作家志望者の、一番どんじりにつくつもりなら、君、何か書いて来給え……。ああ、怖るべき魂だ。あの編輯者が、私を二時間も待たせる根性と少しも変りはない。

私は生涯、この歩道の天幕の広告取りで終る勇氣はない。天幕の中は六月の太陽でむれるように暑い。ほこりを浴びて、私はせいぜい小っぱけな鉛筆をくすねるだけで生きている。

北海道の何処かの炭坑が爆発したのだそうだ。死傷者多数ある見込み……。銀座の舗道はどうはなまめかしくどろどろに暑い。太陽は縦横無尽だ。新聞には、株で大富豪になった鈴木某女の病気が出ている。たかが株でもうけた女の病気がどうであろうと、犯罪は私の身近にたたずんでいる。

23. 小林多喜二「雪の夜」(1932、S7)にみる「乗合自動車の後の映画広告」

雪はまだ降っていた。それでも、その通りの両側には夜店が五、六軒出ていた。そしてその夜店と夜店の間々に雪が降っているので立ち寄るものはすくなかった。が二、三カ所人集(ひとだか)りがあった。その輪のどれからか八木節(やぎふし)の「アッア——ア——」と尻上りに勘(かん)高くひびく唄が太鼓といっしょに聞えてきた。乗合自動車が

グジョグジョな雪をはね飛ばしていった。後に「チャップリン黄金狂時代、近日上映」という広告が貼（は）ってあった。龍介はフト『巴里の女性』という活動写真を思いだした。それにはチャップリンは出ていなかったが、彼のもので、彼が監督をしていた。彼がそれを見たのは恵子とのことが不快に終わったすぐあとだった。彼には無条件にピタリきた。彼は興奮して一週間のうちに三度もそれを見に行った。札売の女が彼を見知り変な顔をした。その写真には、不実ではないが、いかにも女らしい浅薄（あさはか）さで、相手の男と自分自身の本当の気持ちに責任を持たない女のためにまじめな男がとうとう自殺することが描かれていた。そしてそういう女の弱点がかなり辛辣（しんらつ）にえぐられていた。龍介は自分自身の経験がもう一度そこに経験しなおされていることを感じた。

彼は歩きながら『黄金狂時代』はぜひ見に行こうと思った。

24. 直木三十五「大阪を歩く」（1933、S 8）に見る「自分の主張・表現・公言」

それから、又、私は、堀江の「すまんだ」へ行ってみてもいいし、新町橋の四つ目屋へ、買物をしに行ってもいい（これは、いい土産になる）。或は又、京都の、肥後ずいきより、大阪のそれの方が、何んなに、文化的であるか（私が、こういう事を書いたからとて、直に、私の品性を評されては困る。エロ時代だから、大衆作家らしくこうした品物まで研究していると、一寸、向学心を広告したまでで、決して、私が、机の抽出へ入れている訳ではない。第一、私は、机をもっていないのだから）。或は又芝居裏の女郎がいか「洋食弁当」を好くか？　そして、それが、何んなに、特種なものであるか？　とか——つまり、微に入り、細に互り、大阪の文化性を論じ、忽たちまち女郎の弁当に移り、千変万化、虚々実々、上段下段と斬結ぶつもりであったが——雨である。

——（以下中略）——

「大阪を歩く」前篇は、いい評判であつたらしい。

（本紙の社長、前田氏は、よかったよ、と、云っていたが、らしいと疑問にしておくのは、文筆業者の、奥床しさ、というものである）

だが、前篇がよかったからとて必ずしも後篇もいいとは云えない。大抵のいい物でも、続々何々になると、きっと面白くななくなってくるのが、常である。

然し、私は前篇に於て「歩く」つもりをしていながら、歩かなかった。つまり、卓文を書いている内に、約束の十回が終ってしまったのである（前田氏は、十回で、大阪中を歩かせるつもりだったが、そうは行かない。こう見えても、通り一遍の大衆作家で無く、い

ろんな事を心得ているのだから——と、これは、文筆業者としての、広告である)。

25. 堀辰雄「鳥料理 A PARODY」(1934、S9)に見る「夢の中の象」

向うの町角の方が急に騒がしくなる

なんだか人が大勢集っている

私は見上げていた木の傍(そば)を離れてそっちの方へ何時の間にか歩き出している

何か珍らしい行列が向うの町から徐(しず)かにやって来るらしい

あんまり皆が夢中になって見ているので私も人々のうしろから背伸びをして見ている

とうとうその行列が近づいて来たようだ

象だ! 象だ! 象だ! 大きな象が

たった一人で、無頓着(むとんじゃく)そうに、のそりのそりと鼻をふりながら歩いて来る

象の皮膚はなんだか横文字の新聞を丸めたのをもう一度引き伸ばして

貼(は)りつけたように、皺(しわ)だらけで、くしゃくしゃになっている

その背中には真紅な毛氈(もうせん)が掛っている、そうして尚(なお)よく見ると

その毛氈の上には小さな香炉(こうろ)のようなものが載(の)っていて

それから一すじ細ぼそと白い烟(けむり)が立ち昇っている

何かの広告であるらしいがそれが誰にも分らないらしい

隣りの人に聞いてもそれは分らないのが当たり前だと云うような顔をしている

しかしその香炉の烟りは好い匂(におい)がする 何ともかとも云いようのないほど好い匂がする

象が何処どこかへ行ってしまうても何時までもその匂だけが残っている

(そうしてその象の残像と、その匂とだけが私のなかに残っていつか次の場面になってしまっている)

私の向うに温室のようなものが見え出す

それはすっかりガラス張りだ

私がそれを見て温室かしらと思ったのはそのガラス越しに

見知らない熱帯植物のような鉢植(はちうえ)がいくつも室内に置かれてあるのを見たからだ

しかしそれは普通の温室ではないらしい
中にはマホガニ製の小さな卓（テーブル）が五つ六つ一種風致のある乱雑さで配置されている

そしてその上に一つずつその熱帯植物のようなものが飾られてあるに過ぎない
何処かにこんな奇妙な珈琲店（コオフィイテン）があったような気もされてくる

しかしその中には誰もいない 全く空虚（からっぽ）だ

ちょっと這入（はい）って見てそれが何だか確かめてみたい

そんな処ところに勝手に這入り込んでいて叱（し）かられたら

ままよ、それまでだ……と思って私は臆病（おくびょう）な探偵のようにこわごわその中に忍び込む

私がガラス戸を押し開けるや否や、ふんと好い匂がする

それがさっき象のさせていた好い匂とそっくりだ

さっきの匂が私の鼻に蘇（よみがえ）って来たのではないかと思えた位

何ともかとも云いようのないほど好い匂だ

矢張り誰もいない 私はこわごわ一つの卓テーブルの傍に腰を下ろしながら

その匂を捜す……私はそのとき始めて

熱帯植物の鉢植のかげに一つの灰皿があって

それに烟草たばこの吸殻のようなものが一つ置き忘られてあるのに気がつく

それから一すじの白い煙りが細ほそと立ち昇っているのである

どうやらそれから私をすっかり魅している匂が発せられているらしい

私はまた象のことを思い浮べる

そして漸（だんだん）といまあの象が阿片（あへん）の広告であったことに気がつき出す
「ははあ、それだから誰にも分らなかったんだな

なあんだ此処ここは阿片窟（あへんくつ）なのか……」

私はあらためて店の中を見まわしてみる

やっぱり誰もいない 空虚だ

いかにも静かだ ひっそりしている

それでいてつい今しがたまで客が何組かあったのだが

それが皆立ち去ったすぐ跡だと云うような気がされる

店の空気がひどく疲れを帯びているのが感ぜられる

誰もいないのに人氣が漂っている それが鬼気のようにぞっと感ぜられる

何かしら惨劇のあった跡の静けさはこんなものじゃないかしらと思えてくる

もしかしたら今まで此処で客同志の間に殺人事件かなんかあって

その跡始末のために皆この店のものまで残らず出かけて行っていて

それでこんな空虚（からっぽ）なのかも知れん……

そう思って店のなかを見廻すと、一向それらしい形跡はない

椅子やテーブルもちゃんとした位置にある 鉢植も倒れていない

それでいてどう云うものかそれ等らの置き方に妙な不自然さがあるのだ

あちこちへ投げ飛ばされたり、倒されたりしたのをいかにも急（いそ）いで

元のままに直して取り繕ったような不自然さがあるのだ

—そんなことを空想しながら、私はぼんやり頬杖（ほおづえ）をついて

今にも燃えきって無くなりそうな灰皿の吸殻を見つめている

それから発せられている匂は私の空想を大いに刺戟（しげき）している

「おれは遅参者だ……一足遅れたばかりに、きっとおれを喜ばせたに相違ない、何かの惨事

に立会い損（そこ）なった不運者だ」

そこでもって私の夢のフィルムがぴんと切れてしまう……

それで私は読者諸君にも、ただこんな風に

「まだその顰（しか）め面つらをしている

今起ったばかりの惨事の古代的な静けさ」を

お目にかけるよりしかたがないのだ

26. 古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和九年」（1934、S9）に見る「広告」言説

三月十九日（月曜）

午前八時半起き、ゆふべアダリン四錠のんだのでまだフラ／＼。十時に青山のポリドールへ行く。二回歌って、三回目のは本盤。出がうまく行かなかったやうな気がするが、O・Kなら早く帰らうと浅草へ。此の分、広告だからもっとうんと取りたかったのだが鈴木俊夫が仲へ入ったので（50）しかとれず。浅草で理髪し、ひるの部終って中西でランチを食ひ、青山師範の雨天体操場へ、卒業生の送別会で六時から一席（20）。学生のことゝて大受け。帰ると、福田宗吉来り、二十二・三日の仕事のことを打ち合せる。これから此の四五日つゞけさまにオザあり。シーズンが来たと見える、あまりムチャをせず、声を養生しよ

う。

——（以下中略）——

十二月十一日（火曜）

座へ出る、入り悪し。十日に帰ると言ってきた三益まだ帰らず、正木だから尚いけな。一っそこんな入りのない日は「クレオ」がらくでい。日本評論新聞の記者てのが二人、赤新聞のひどいのだ、いろ／＼言って結局年賀広告を出せと言ふのだ。次には松ノボルってエノケンの役者が猥画を買って呉れと言ってきたり、いやはや。然し一々来るヘンな物もらひに、ズバ／＼金を呉れてやりたいものだ。夜の部やって新宿まるやへ徳川夢声に逢ひに行く。

27. 萩原朔太郎「秋と漫步」（1935、S10）に見る「開店広告の赤い旗」

秋の日の晴れ渡った空を見ると、私の心に不思議なノスタルジアが起って来る。何処（どこ）とも知れず、見知らぬ町へ旅を試みたくなるのである。しかし前にいう通り、私は汽車の時間表を調べたり、荷物を造ったりすることが出来ないの、いつも旅への誘いが、心のイメージの中で消えてしまう。だが時としては、そうした面倒のない手軽の旅に出かけて行く。即ち東京地図を懐中にして、本所（ほんじょ）深川の知らない町や、浅草、麻布（あざぶ）、赤坂などの隠れた裏町を探して歩く。特に武蔵野（むさしの）の平野を縦横に貫通している、様々な私設線の電車に乗って、沿線の新開町を見に行くのが、不思議に物珍らしく楽しみである。碑文谷（ひもんや）、武蔵小山（こやま）、戸越（とごし）銀座など、見たことも聞いたこともない名前の町が、広漠たる野原の真中に実在して、夢に見る竜宮城のように雑沓している。開店広告の赤い旗が、店々の前にひるがえり、チンドン楽隊の鳴らす響きが、秋空に高く聴（きこ）えているのである。

28. 宮本百合子「日本の秋色——世相寸評——」（1936、S11）にみる「ポスター」

きのう、用事があって出かけ、バスの停留場に立っていたら、向う側の酒屋の横の「英語、タイプライティング教授」とペンキ塗の看板のわきに、もう一つ今まで見当らなかった広告が出ているのに心付いた。とりいそいでこしらえたらしい紙の広告で「オリンピックにそなえよ！」と上の方に横書きされ、下に「速成ガイド資格準備、速成オリンピック用会話教授」と大書されたわきに、それぞれ赤インクで線がひいてある。二三日前の雨のせ

いで、赤インクは佻しく流れ滲んでいるのであるが、この自宅英語塾主は、それ程の積極性をこの広告の効果に認めていないと見え、よごれた特別広告はそのまま、錆のふいた門の鉄扉の外ではためいている。

四年後のオリンピック東京招致に亢奮した感情や、今回のベルリン・オリンピックに出場した日本選手に対する感情、又一般にひきくるめて日本の役人たちがオリンピックに対して一般民衆の感情を向けようとして煽り立てたその方向や現実の結果について、今日、民衆の常識は、どのような判断を加えているであろうか。苦々しいものが、めいめいの胸にのこされた。スポーツをスポーツとして朗らかに若者らしく愛すものの心に、或る憤りが生れた。四年後のオリンピックに、この民衆の真の感情がどのように反映し、生かされるであろうか。

29. 永井荷風「遷東綺譚」(1937、S12) にみる「懸賞広告」と「東京音頭」

帯葉翁(そうようおう)とわたくしとが、銀座の夜深(よふけ)に、初めてあの娘の姿を見た頃と、今年図らず寺島町の路端でめぐり逢った時とを思合せると、歳月は早くも五年を過ぎている。この間に時勢の変ったことは、半玉のような此娘の着物の肩揚げとれ、桃割が結綿(ゆいわた)をかけた島田になった其変りかたとは、同じ見方を以て見るべきものではあるまい。四竹を鳴して説経を唱うたっていた娘が、三味線をひいて流行唄(はやりうた)を歌う姉さんになったのは、子(ほうふり)が蚊になり、オボコがイナになり、イナがボラになったと同じで、これは自然の進化である。マルクスを論じていた人が朱子学を奉ずるようになったのは、進化ではなくして別の物に変ったのである。前の者は空(くう)となり、後の者は忽然(こつぜん)として出現したのである。やどり蟹(がに)の殻の中に、蟹ではない別の生物が住んだようなものである。

われわれ東京の庶民が満洲の野(や)に風雲の起った事を知ったのは其の前の年、昭和五六年の間であった。たしかその年の秋の頃、わたくしは招魂社境内の銀杏(いちょう)の樹に三日ほどつづいて雀合戦のあった事をきいて、その最終の朝麴町(こうじまち)の女達と共に之を見に行ったことがあった。その又前の年の夏には、赤坂見附の濠(ほり)に、深更人の定(さだ)まった後、大きな蝦蟇(がま)が現れ悲痛な声を揚げて泣くという噂が立ち、或新聞の如きは蝦蟇を捕えた人に金参百円の賞を贈ると云う広告を出した。それが為め雨の降る夜などには却(かえ)って人出が多くなったが、賞金を得た人の噂も遂に聞かず、いつの間にかこの話は烟(けむり)のように消えてしまった。

—（以下中略）—

東京音頭は郡部の地が市内に合併し、東京市が広がったのを祝するために行われたように言われていたが、内情は日比谷の角にある百貨店の広告に過ぎず、其店で揃（そろ）いの浴衣（ゆかた）を買わなければ入場の切符を手に入れることができないとの事であった。それはとにかく、東京市内の公園で若い男女の舞踏をなすことは、これまで一たびも許可せられた前例がない。地方農村の盆踊さえたしか明治の末頃には県知事の命令で禁止せられた事もあった。東京では江戸のむかし山の手の屋敷町に限って、田舎から出て来た奉公人が盆踊をする事を許されていたが、町民一般は氏神の祭礼に狂奔（きょうほん）するばかりで盆に踊る習慣はなかったのである。

わたくしは震災前（ぜん）、毎夜帝国ホテルに舞踏の行われた時、愛国の志士が日本刀を振（ふ）るって場内に乱入した為、其後舞踏の催しは中止となった事を聞いていたので、日比谷公園に公開せられた東京音頭の会場にも何か騒ぎが起りはせぬかと、内心それを期待していたが、何事も無く音頭の踊は一週間の公開を終った。

30. 伊丹万作「広告」（1937、S12）に見る「広告」

この一文は私の友人の著書の広告であるから、広告のきれいな方はなにとぞ読まないでいただきたい。

このたび私の中学時代からの友人中村草田男の句集が出た。署名を『長子』という。

一部を贈られたから早速通読して自分の最も好む一句を捨てた。すなわち、

冬の水一枝の影も欺かず

草田男に会ったときこの一句を挙げて賞したところ、彼もまた己が意を得たような微笑をもらったからおそらく自分でも気に入っているのであろう。

彼は早くから文芸方面の素質を示し、いかなる場合にも真摯な研究態度と柔軟にして強靱なる生活意欲（芸術家としての）を失わなかつたから、いつか大成するだろうと楽しみにしていたのであるが、この著書を手にして私は自分の期待の満される日があまりにも間近に迫って来ていることを知つて驚きもし、歓びもした。

私は中村の著書の中に、子規以来始めて「俳句」を見た。

もつと遠慮なくいえば芭蕉以後、芭蕉に肉迫せんとする気魄を見た。

私には詩はわからない。なぜなら私は散文的な人間であるから。

しかし私のいだいている概念からいえば、詩というものはひたすら写実の奥底にもぐり込んで、その奥の奥をきわめた時、あたかも蚕が蛾になるように、無意識のうちに写実のまゆを突き破つて象徴の世界に飛び出すものでなければならぬ。そしてそれはいかなる場合においてもリズムの文学でなければならぬ、少なくとも決してリズムを忘れ得ない文学でなければならぬと考えている。

そして、私のこの概念にあてはまるものは残念ながら現代にはきわめて乏しい。

そこへ中村の『長子』が出た。

私は驚喜せずにはいられない。

これこそ私の考えている詩である。彼こそ私の描いた詩人である。

しかも、それが自分に最も近い友人の中から出ようとは。しかも、現代においては危く忘れられかけている「俳句」という、この素朴な、古めかしい、単純な形式の中に詩の精神がかくまでも燦然たる光を放つて蘇生しようとは。

最初、中村から「俳句」をやるという決心を聞かされたとき、私はこのセチがらい時勢に生産の報酬を大衆層に要求し得ないような、そんな暇仕事を選ぶことについて漠然たる不満と同時に不安を感じた。

しかし、いま彼の句を見て、その到達している高さを感じ、彼の全生活、全霊が十七字の中にいかに生き切っているかを知つて、私は自分の考えをいくぶん訂正する必要がある。しかし、その残りのいくぶんは依然として訂正の必要がないということは遺憾の極みである。

彼ほどの句をものしてもなおかつ俳句では食えないのである。したがつて彼はいま学校の教師を職業としている。

そしてこのりつばな本も売れゆきはあまりよくないということを彼から聞かされた。

私は私の雑文に興味を持つて下さるほどの人々にお願いします。なにとぞ彼の本を買つてください。

彼の本はおそらく私のこの雑文集に何十倍するだけの心の糧を諸君に提供するに違いない。

彼の本は沙羅書店から出ている。

おわりに『長子』の中から私によくわかる句を、もう少し捨い出して紹介しておく。

土手の木の根元に遠き春の雲

松風や日々濃くなる松の影

あらましを閉せしのみの夕牡丹
夏草や野島ヶ崎は波ばかり
眼の前を江の奥へ行く秋の波
降る雪や明治は遠くなりけり

（昭和十二年四月二十六日）

31. 中原中也「在りし日の歌」（1938、S13）に見る「広告気球」

秋の消息

麻は朝、人の肌（はだ）へに追い縋（すが）り
雀らの、声も硬うはなりました
煙突の、煙は風に乱れ散り

火山灰掘れば氷のある如く
顚（けざ）やけき気（かうき）の底に青空は
冷たく沈み、しみじみと

教会堂の石段に
日向ぼつこをしてあれば
陽光（ひかり）に廻めぐる花々や
物蔭に、すずろすだける虫の音（ね）や

秋の日は、からだに暖か
手や足に、ひえびえとして
此の日頃、広告気球は新宿の
空に揚りて漂へり

32. 岡本かの子「巴里祭」（1938、S13）に見る「広告」

昼の食事の時刻も移ったと見えて店内の客はぼつ／＼立上って行く。男女二人ずつ立って行く姿が壁鏡に背中を見せる。給仕（ギャルソン）がブリオーシュ（パン菓子）を籠に

積み直してテーブルに腹匍（はらばい）になって拭く。往来の人影も一層濃くなって酒に寛（くつろ）げられた笑い声が午後の日射しのなかに爆発する。群衆の隙から斜めに見えるオペラの辻の角のカフェ・ド・ラ・ペイには双眼鏡を肩から釣り下げたり、写真機を持った観光の外人客が並んで、行人に鼻を突き合わせるほど道路にせり出して、之れが花の巴里の賑いかと気を奪われたような、むずかしい顔をして眺めて居る。行ったり来たりして、しつこく附纏う南京豆売り、壁紙売り。角のカフェ・ド・ラ・ペイとこっちのイタリー街の角との間は小広く引込んだ道になっていて、其の突当りがグランド・オペラだが此所からは見えない。たゞその前の地下鉄の停留所の階段口から人の塊が水門の渦のようになって、もく／＼と吐き出されるのが見える。

暫らく雲が途絶えたと見え、夏の陽がぎらぎら此の巷（ちまた）に照りつけて来た。キャフェの差し出し日覆いは明るい布地にくっきりと赤と黒の縞目を浮き出させて其の下にいる客をいかにも涼しそうに楽しく見せる。他の店の黄色或いは丹色の日覆いも旗の色と共に眼に効果を現わして来た。包囲した関（とき）の声のような喧騒に混って音楽の音が八方から伝わる。

新吉は向う側の装身具店の日覆いの下に濃い陰に取り込められ、却（かえ）って目立ち出した雲母の皮膚を持つマネキン人形や真珠のレースの滝や、プラチナやダイヤモンドに嘯みついているつくりもの、狎（ちん）や、そういう店飾りを群集の人影の明滅の間からぼんやり眺めて、流石に巴里の中心地もどことなくアメリカ人の好みに倣（おもね）ってアメリカ化されているけはいを感じた。けば／＼しい虎の皮の外套を着たアメリカ女。早昼食（クイックランチ）。「御勘定は弗ドルで結構でございます。」と書いた喰べ物屋のびら。筋向いのフォードの巴里支店では新型十万台廉売の広告をしている。

33. 横光利一「旅愁」（1940、S15）に見る「野立看板」

「僕もなかなか面白かったな。」

と矢代は久慈の先手を打ったつもりであったが、駅を出た野の美しさに、もう人人は耳を傾けようとしなかった。昨日ノートル・ダムの上から見た半島が現れ、丘が見え、海が開けて来るに随って、だんだんマルセーユは遠ざかっていった。

杏の花の咲き乱れている野、若芽の萌え出した柔かな田園、牧場、川と入れ代り立ち変り過ぎ去る沿線の、どこにもここにも白い杏の花が咲き溢れて来て、やがてローヌ河が汽車と共にうねり流れ、円転自在に体を翻しつつもどこまでも汽車から放れようとしなかつ

た。

矢代はしだいに旅の楽しさを感じて来た。たしかにフランスの田園は日本のそれとは全く違った柔かな、撫でたいような美しさだと感歎した。一木一草にさえも配慮が籠っているかと思える築庭のような野であった。

その野の中をローヌの流れが広くなり狭くなるにつれ、芝生の連りのような柔軟な牧場ばかりがつづいて来た。一本の雑草もないようなゆるやかなカーブの他は山一つも見えなかった。

「フランスの田園の美しさは、世界一だと威張っているが、なるほど、これじゃ威張られたって、仕様がないなア。」

と三島が云った。

「こんなに綺麗だと、見る気もしないや。これじゃ、パリはどんなに美しいのかね。」

と商務官が云う。

「さきから見てるんだけど、鉄道の両側に広告が一つもないな。バタの広告がたった一つあるきりだ。村も日本の十分の一もないが、これで都会文化が発達したのだね。」

「フランスは自国民の食うだけのものは、自国内にあるんだから、植民地の蔵から軍備費だけは、充分出ようさ。」

こう云う医者に商務官はまた云った。

「しかし、われわれがヨーロッパ、ヨーロッパと騒いで来たのは、騒いだ理由はたしかにあったね。いったい自分の国を善くしたいと思うのは人情の常として、誰にでもあるものだが、騒ぎすぎると、次ぎには要らざる人情まで出て来るのがそれが怖いよ。」

若干の確認（備忘）

広告は社会的コミュニケーションの回路（チャンネル）でもある（マクルーハンならば「広告というメディアはメッセージである」と言うのだろう）。したがって、社会の変化、メディアの変化が一体となって文芸作品という写像にも万華鏡のように複雑な影響を及ぼす。しかしそれは単に書き手の持つ世界を表すことを超えて、文芸という代表的顕在性をもって、その時代以降の多くの読み手にその時代の広告とはこういうものである、という表象、また「日本語」の意味、用法に影響を再生産する文化装置である点が重要である。あるいは、語のコードについての漂泊点と言える。多くの人が「読んでいるもの」であり「多くの人が読んでいる」気がしながら読むものであり、さらに「同時代の社会像」であり

「日本語の手本となるもの」なのである。

こういった一步引いた20世紀までの「社会的資産」として近現代の文芸をメディア研究の手掛りとして利用する中で、やはり「広告」というコミュニケーションが、マス・メディアと結びつくことや、結びつかないこと、また、インターネットと携帯で代替可能なことや、代替不可能なことを指し示す。

こうした観察を通じて常に確認されることは「あったかもしれないこと」あるいは「そうではなかったかもしれないこと」への想像力を逞しくすることの重要性である。素材を引き続き収集する。

注

- 1) 典拠文献は、基本的には初出を渉猟しようと試みたが、本研究ノート末尾に示した典拠文献が、書籍の形として筆者が目視・確認できた最古の文献である。ただし書籍としての最古の典拠について、国会図書館（東京本館）においてもなお現物が十分に確認できないものも残念ながら含まれている。たとえば1. に掲げた坪内逍遙の著名な著作についても、初めには短いものが上梓され、人気を博するにつれて版が重なり、内容もどんどん追加され、（当初「春のやおぼろ」という筆名自体が坪内逍遙に変わり）版元も転々とする。その頻度も年に複数回あり国会図書館所蔵本がすべてをカバーしていると言い切れない。末尾に示した典拠文献は当該の記述が目視・確認できた最古の版ではあるが、これが最古である、という決定的な証拠はない。したがって、ここに掲げた典拠文献は「可能な限り遡及した」ものである。またいわゆる『全集』や『保存版』に頼り、必ずしも初出時とは正確に同じであると言い切れない。確認したものが、あきらかに後年のものでありながら遡れないものもあった。こういった点に関して文学研究としては甘いが、本ノート冒頭にも述べた通り広告研究としての目的を優先した。
- 2) 同様の理由で、本ノートでは記述は、基本的に読みやすさを優先し、新書体、新かな遣いとし、初出時には当時繁用された「ルビ」は、その使用された漢字の直後に（ ）内に記し簡略化した。

典拠文献（番号は本文掲出順序の番号に同じ）

1. 坪内逍遙（春のやおぼろ）（1887）『当世書生気質 一読三嘆』p.295、晚青堂
2. 斎藤緑雨（1903）『青眼白頭』『みだれ箱』所収、p.253、博文館
3. 徳富蘆花（1903）『不如帰』p.129、民友社
4. 黒岩涙香（1977）『別冊幻影城保存版 No.10』p.21、幻影城
5. 夏目漱石（1924）『漱石全集 第10巻 初期の文章及詩歌俳句』p.17、漱石全集刊行会
6. 島崎藤村（1906）『破戒』p.7、上田屋
7. 田山花袋（1908）『花袋集』p.68、易風社
8. 森田太郎（1927）『鷗外全集 第5巻』p.399、鷗外全集刊行会
9. 木股知史編著（2006）『明治大正昭和小品選』p.98、おうふう
10. 有島武郎（1922）『有島武郎全集 第四巻』p.25、叢文閣

11. 与謝野寛・与謝野晶子（1914）『巴里より』p.60、金尾文淵堂
12. 吉野作造（1995）『吉野作造選集3』p.174、岩波書店
13. 薄田泣菫（1939）『薄田泣菫全集 第三巻』p.126、創元社
14. 芥川龍之介・室生犀星（1929）『明治大正文學全集 第四十五巻芥川龍之介室生犀星』p.577、春陽堂
15. 菊池寛（1920）『真珠夫人 前篇』p.293、新潮社
16. 芥川龍之介（1934）『芥川竜之介全集 第6巻』p.252、岩波書店
17. 夢野久作（1979）『夢野久作著作集2 東京人の墮落時代』p.176、葦書房
18. 正岡子規（1923）『子規全集 第7巻（隨筆）』p.165、アルス
19. 久保田万太郎（1948）『久保田万太郎全集 第12巻』p.3、好學社
20. 東京日日新聞社編（1928）『大東京繁昌記 [山手篇]』p.340、春秋社
21. 佐藤紅緑（1928）『あゝ玉杯に花うけて』p.74、大日本雄弁会講談社
22. 林芙美子（1955）『放浪記 林芙美子作品集第一巻』p.299、pp.323-326、新潮社
23. 小林多喜二（1958）『小林多喜二全集 第1』p.177、かすが書房
24. 直木三十五（1989）『直木三十五作品集』p.791、p.793、文藝春秋
25. 堀辰雄（1939）『燃ゆる頬：他八篇』pp.169-175、新潮社
26. 古川緑波（2007）『古川ロッパ昭和日記〈戦前篇〉』p.32、p.118、晶文社
27. 萩原朔太郎（1936）『廊下と室房』p.45、第一書房
28. 宮本百合子（1979）『宮本百合子全集 第十四巻』pp.590-591、新日本出版社
29. 永井荷風（1937）『墨東綺譚』p.162、p.177、岩波書店
30. 伊丹万作（1937）『影画雑誌』pp.354-357、第一芸文社
31. 中原中也（1951）『中原中也全集 第一巻（詩集）』p.80、創元社
32. 岡本かの子（1938）『巴里祭』p.129、青木書店
33. 横光利一（1940）『旅愁 第一篇』p.71、改造社

参考文献

- 天野祐吉（1993）『日本の名随筆 別巻23 広告』作品社
- 朝日新聞大阪本社広告局（1963）『新聞広告で見る世相85年』（非売品）
- 古郡康人（1993）「森鴉外『独身』論」『藝文研究』慶應義塾大学、pp.197-214.
- 市古貞次・久保田淳編（2002）『日本文学大年表』おうふう
- 猪木武徳（2004）『文芸にあらわれた近代日本——社会科学と文学のあいだ』有斐閣
- 勝又浩監修（2005）『文芸雑誌小説初出総覧：1945-1980』日外アソシエーツ
- 勝又浩監修（2007）『文芸雑誌小説初出総覧 作品名篇』日外アソシエーツ
- 小田切進編（1993）『日本近代文学年表』小学館
- 佐藤信夫（1977）「広告と文学のことばの形」『早稲田文学』通巻10号、pp.19-22.
- 植田満文（1978）『文学にみる広告風物誌』プレジデント社
- 辻大介（1998）「言語行為としての広告」『マス・コミュニケーション研究』52号、pp.104-117.
- Wicke, Jennifer, A. (1988), *Advertising Fictions: Literature, Advertisement, and Social Reading (Social Foundations of Aesthetic Forms)* 編集 高山宏 邦訳 富島美子（1996）『広告する小説（異貌の19世紀）』国書刊行会